

《特別講演》

脳 と 心

東京大学医学部精神医学教室教授
松 下 正 明

心身相関論、つまり心と脳の問題は、精神医学者といわず、神経学者にとっても永遠のテーマである。心の住み家が脳であることには異論がないとしても、心のさまざまな現象も脳のこまかな部位をそれぞれの座としているのかどうか。この問いは古代文明から現代に至るまで絶えることがない。

この問いは精神機能局在論といわれるが、19世紀初頭のJ.F. ガルの骨相学をもって嚆矢となす近代的局在論は、現代のCTやMRI、あるいはSPECTやPETなどの神経画像研究の発展によって、一層の拍車かけられ、いまや花盛りといっている。そして、かつてブラックボックスにあったさまざまな精神事象、あるいは病的な精神事象が、その局在論を背景に機能的・構造的背景を垣間見せるようになってきたことは学問の進歩とはいえ驚きである。

画像研究の進歩が、精神機能局在に関する知見を増大させ、精神機能を構造や物質に還元して考えるといういわゆる還元主義を徹底させてきたことは否めない。いま、多くの医師や研究者は局在論、還元主義にたつ。とくに画像の専門家においてそうであるように私にはみえる。立場の可否はともかくとして、局在論・還元主義にいくつかの大きな混乱が生じている。その一つとしてここで指摘しておきたいのは、心と脳を考える場合、普通の心の現象と病的な心とを厳密に区別しなければならないのに、それを混同しているという事態である。両者は写真のポジ・ネガの関係のようにみえて、実は全くの別物であるという認識が必要である。たとえば、記憶と記憶障害とは、精神機能局在という立場では、異なった現象であるという理解である。

さて、そのようないくつかの混乱は避け得たとしても、では還元主義で心や心の病気の全体が理解されるようになるのかという、とりわけわれわれ精神医学者が抱く疑問はまだ解決されたわけではない。

以上のような基本的な考えに立って、本講演では、自らの臨床経験と精神病理形態学的研究を材料にして、心と脳の問題を考えてみたい。臨床と病理であるからもちろんのこと、病的な精神機能がテーマとなる。取りあげる疾患は、記憶障害や意欲障害を初発として高度の痴呆、高次精神機能の全般的障害を症状とし、脳病理としては大脳皮質全域が侵されるアルツハイマー病、人格障害や意欲障害、精神機能の緩慢さを主症状として、脳幹に限局した病変をもつ脳炎後パーキンソン症候群（エコノモ脳炎）、幻覚や妄想、思考障害などの陽性症状や、特有な人格障害、自発性障害などの陰性症状を示す精神分裂病である。

これらの疾患において、心と脳との関連はどうなっているのだろうか。